

京都大学若手人材海外派遣事業 ジョン万プログラム（職員派遣）
平成30年度事務職員短期派遣プログラム報告書

研 修 者	職 名	企画・情報部企画課 主任
	氏 名	森 智子
研 修 先 等	渡 航 先 国 名	ドイツ
	研 修 先 機 関 名	京都大学欧州拠点
	研 修 期 間	平成30年10月3日～平成31年3月26日
具体的な研修内容	<p>京都大学欧州拠点において半年間勤務。拠点の掲げる4つのミッション（研究活動支援、教育活動支援、本学の教職員・学生の国際化、及びネットワーク形成）を意識しながら、来訪者に拠点ミッションを説明するなどの来客対応のほか、拠点における日常的な会計や総務的な事務処理を担当した。また、交代で拠点に滞在しているURA（リサーチ・アドミニストレーター）とともに留学生フェアなどの各種イベントに参加したほか、欧州における協力機関を訪問する機会を数多く得た。</p> <p>以下、4つのミッション毎にそれぞれ特に印象に残った事柄について報告を行う。</p> <p>1. 研究活動支援</p> <p>相互にオフィスを持つハイデルベルク大学と京都大学が両大学の学術交流の深化と発展を目指し、欧州と京都とで不定期に開催している『日独ジョイントレクチャー』に関わる機会を二度得ることができた。</p> <p>欧州拠点近郊に滞在中の本学教員を講師に招き、解説をハイデルベルク大学の教員に依頼する形で毎回開催され、私は主にポスター準備などの事前の広報活動に関わった他、当日の会場セッティングを担当した。</p> <p>講義を計画、準備する中でハイデルベルク大学教員の誰に解説を依頼するか、URAと現地スタッフとがアイデアを出しながら講師に確認していく様子を目にした。URAが教員の立場に立ちながらも異なった視点で意見を述べ研究を支援する様子を見ることで、これまで知ることのなかったURAやKURA（学術研究支援室）の活動の価値を感じることが出来た。</p> <p>また、中央事務室に勤務していた時には乏しかった教員との対話の機会が増え、海外滞在中の感想や過去や将来の研究計画を直接聴くことが出来たのも大きな刺激となった。</p>	

2. 教育活動支援

11月にロンドンで開催された留学生フェア『Experience Japan Exhibition 2018』にブース出展し、京都大学への留学を検討している学生からの相談対応をした他、京都大学への留学誘致のためのプレゼンテーションを英語で行った。英国の学生に向けたスライドを準備し、英語で発言内容を考えることは初めての経験であり、英語力とプレゼン力を同時に鍛える良い実践の場となった。

3. 本学の教職員・学生の国際化

着任後間もなくの10月には、シュトゥットガルト大学主催の国際事務職員研修『World Seminar for International Administrators』に一週間、単身で参加した。台湾、中国の他にロシアやオーストラリア、南アフリカの各大学から参加者が集まり、ドイツ国内（主にバーデン・ヴュルテンベルク州）の教育システムについての知見を深める機会となった。ドイツの教育システムで特徴的なのは、基礎学校（Grundschule）を卒業する10歳前後という非常に早い時期に将来大学に進学するつもりがあるかどうかを考え、その先の進路を決定する必要があるということである。高等教育への進学を希望する場合はギムナジウム（Gymnasium）という長期教育課程に入り大学入学資格（Abitur）を取得することになるが、中には英語とのバイリンガルを養成するためのギムナジウムもあり、非常に人気が高いとのことであった。

私にとってこの研修はドイツの教育システムを学ぶ機会となっただけでなく、英語が大学事務の共通言語として当たり前で使用されていることを実感する初めての場となった。滞在初期の段階で自分の英語力不足を痛感し、以後は自宅でも時間を見つけてリスニングの訓練を行った結果、徐々に効果が現れているように感じた。

また、12月には『Japan Erleben（日本を体験する）』というイベントで、ケルン大学に留学中の本学学生にドイツ人の前でドイツ語を使って発表する機会を提供。自分が英語で初めてプレゼンを行った時のことを振り返ると、今後の留学生活の糧となる充実した経験になったことと思う。

4. ネットワーク形成

本邦系の機関が集まる『JANET フォーラム』に参加し、JSPSの国際協力研究員、また他大学の国際担当者や教員と知り合う機会を得た。他大学の海外拠点については、常駐の事務職員が派遣されている

	<p>例はほとんどなく、京都大学のように URA が交代で勤務する体制を敷いていることは、拠点活動の幅を広げていく上で非常に強みであると感じた。</p> <p>フォーラムの中で JETRO（日本貿易振興機構）から講師を招いて GDPR（EU 一般データ保護規則）についての基本概念と対応事例に着いての講義があり、同じく欧州に拠点を持つ機関同士で問題意識を共有することができた。その後、大学本部とも相談の機会を持つなど大学全体で対策を考える必要性を痛感したが、フォーラム時の白熱した様子を目の当たりにした後では、普段欧州機関と接点のない部署との温度差を感じることもあった。この現場との危機感の差を埋めていくことが、欧州拠点に滞在させてもらっている者の役割なのだと改めて考えさせられた。</p> <p>また、直接ネットワークメンバーと顔を合わせる場を持つことで、互いの活動内容や問題意識を知ることができると同時に、以後、様々な情報交換がしやすくなることを実感した。実際にその後ボンにある JSPS の研究連絡センター、筑波大学のオフィスを訪問し、研究資金の情報を得たり大学独自の取り組みを聞いたりするなど、本邦系組織が連携し協力していくことの重要性、有益さを知ることとなった。</p>
<p>本学の国際化に対する研修成果の活用方法・フィードバック</p>	<p>欧州では想像していた以上に学生や職員のモビリティが高く、特にドイツに於いては事務職員であっても英語が自由に使えることは前提になっているようであった。単純に日本と比較することは出来ないが、海外との交流を一層深めようとした際に、受け入れ側の体制の弱さは少なからぬ壁となるように思える。</p> <p>同時に、日本では海外留学は一部の人間だけがするものであるという意識もまだ強いように思われるが、既に欧州に於いては海外留学は当たり前の選択に過ぎないと感じた。言語の壁以上に、この「当たり前の」意識の違いが国際化を進める上での鍵になるのではないだろうか。</p> <p>研修をした個人の英語力向上だけを見れば小さなことではあるが、この研修で体験した欧州における「国際化の常識」を日々の仕事の中で周囲に発信することで、身近なところから意識改革を図っていければと考えている。</p> <p>また、今回の研修期間中に URA 始めこれまで関わりのなかった部署の職員と知り合う機会を多く得ることができた。今後もこのような人との繋がりを大切にし、どのような部署で勤務することになっても大学全体の動きを注視しながら国際化に向けて連携して仕事に取り組んでいきたい。</p>